

## ゴミ箱のない公園



ぼくの住む町には、多くの公園がある。ベンチとトイレだけの「えびす公園」、めずらしい遊具が設置されている「はとぼっ公園」などさまざまあるが、一番大きな公園は呉市中央公園で、呉市民の憩いの場として親しまれている。ライトアップされる噴水塔や県木を集めた「ふるさとの森」、呉市の花「つばき」が四百本近く植えられたつばき庭園などがある。朝夕はジョギングや、犬の散歩をする人も多く、いろいろな人たちに利用されている。ぼくも、休みの日には広い芝生で、父とよくキャッチボールをしている。広々とした公園で、朝早くから体を動かすことはとても気持ちが良い。

夏休みになり、父と朝早く中央公園まで散歩に行った。月曜日だったが、多くの人が散歩やジョギング、体操など思い思いに過ごしていた。ぼくと父もキャッチボールを始めようとした時、噴水前の芝生にたくさんの花火の燃えかすが散乱しているのを見つけた。

「ここで花火をしたらいけないって、看板があるのに。」

「うん。でも夜になるとよく花火をして騒ぐ者がいるそうだと、父が言った。」

「せめて、燃えかすはゴミ箱に入ればいいのに。」

そう言って、周りを見回すと、そこにはビニール袋のゴミがたくさん押し込められ、今にもあふれ出しそうなゴミ箱があった。よく見てみるとビニール袋の中には缶やペットボトル、弁当がら、そして生ゴミらしきものも入っている。

「これって、家のゴミを持ってきて入れてるってこと。」

ぼくは、思わず声をあげてしまった。

「そうだな。ゴミ箱にも『家庭ゴミを入れないでください』って張り紙があるってことは、そういうことをする人が多いんだろう。」

「どうしてそんなことをするんだろう。」

「呉市はゴミを出す時の分別の仕方が細かく決まっているし、ゴミ袋も買わなくちゃいけないから、めんどろなかもしれないな。」

「めんどろだからって、ここは公園だよ。そこに家庭ゴミを捨てるなんて考えられないよ。そんな自分勝手な人のために、ゴミ箱なんて置かなければいいんだ。」

ぼくは、だんだん腹が立ってきた。公園にある二十あまりのゴミ箱のほとんどが、同じ状態のようだ。

結局、ゴミ箱からあふれ出していたゴミは、シルバー人材センターの人たちによって片づけられた。父が話を聞いてみると、毎週月曜日は家庭ゴミが多く、他の日の倍以上入っているということだ。これまでもいろいろ対策を考えてきたが、いい方法が見つからないそう。その日の朝は、いつもの気持ちのよさを感じることもなく家に帰った。



それからしばらくして、夏休みも終わりがけたある日、ぼくは友達二人と近所の「古川公園」へ行った。ここは、遊具や小さな砂場、ベンチとトイレがあり、小さな子どもや小学生がよく遊んでいる公園だ。行く途中、とてもものが渴いていたので、自動販売機でジュースを買って、公園で友達と飲んだ。飲み終えた後、缶を捨てようとしたが、どこを見てもゴミ箱がない。これまで気づかなかったが、この公園にはゴミ箱がなかったのだ。

「どうする。この缶。」

「自動販売機の横には回収箱があったと思うけど。」

「また自動販売機までもどるのは、めんどろだよ。」

ぼくたちは、つい植木のすみに缶を入れ込んでしまった。



「ゴミ箱をおいていないから、仕方ないよ。」

「そうだよ。ぼくもゴミ箱があれば、きちんと捨てるよ。」

「みんなが使う公園には、ゴミ箱が絶対必要だよ。」

ぼくはそう言った後で、はつとした。この間父と見た、中央公園のゴミ箱のことを思い出した。ゴミ箱って本当に必要なのか。ゴミ箱さえあれば、それで公園はきれいになるのだろうか。

町の公園にゴミ箱がないのは、ぼくたちへのメッセージのように思えた。ぼくは植木のすみに入れた缶を取り出し、自分の自転車のかごに入れて、家へ持ち帰った。

公園の中にはあちらこちらにいろいろな看板が掲げられていた。

「鳥にえさをやらないでください。」

「ペットのふんは持ち帰ってください。」

「池の中に入らないでください。」

「花火をしないでください。」

どの公園も、市民にとって本当に憩いの場となるよう、その利用の仕方を考え直さなければいけないのではないだろうか。